

## 前略

各位、いかがお過ごしでしょうか。

国会は、7年度予算案を通しましたが、米国・財界いいなりの大軍拡予算がほとんど審議されず、またマスコミも取り上げず、暮らし予算や教育、福祉予算が削られるという、国栄えて民滅ぶという、戦前ののような危機的状況下にあると思います。

われわれは、大局を見失わないようにしなければならないと、自戒する次第です。

そんな中、先日、友歩会の例会（岐阜編P17）に参加しました。

名鉄笠松駅から各務原の市民公園前駅までの約11Km、満開の桜や菜花の咲き誇る中を史跡巡りに歩いてきました。（コースマップは下記HPにあります。）

その様子を下記HPにしたのでご覧いただければ幸いです。

<https://icurus-jk2unj.ssl-lollipop.jp/gifu108.htm>

この中で、見落としてはならないのは、木曽川の流れが変わることで、866年には美濃国と尾張国の間で「広野川事件」が起き、さらに、1586年の大洪水によって木曽川の本流が南へ移動して現在の河道に落ち着いたということです。

現在の「境川」の名称（美濃国と尾張国の境）もこれに由来しているという事です。

（wikipedia参照）

私は、以前、羽島市に在住していた頃、地域の歴史の先生から、墨俣の一夜城は、1566年に秀吉が完成させたと言われるが大洪水（1586）以前であり、木曽川の本流であった現在の境川から木材を陸揚げして作られたものだと聴講したことがあります。それを長良川に少し遡上して作る筈はない、と。今でも鮮明に覚えています。その先生は、既にお亡くなりになったと聞いています。

そんな境川であり、木曽川です。

史跡としては、関ヶ原の戦いの前哨戦である「米野の戦い」（1600年）とはるか以前の「承久の乱」（1221年）の闘いは、「公・武の階級闘争！」の終始を物語る歴史上の画期をなすものとして、貴重な史跡ですね。

MyHPでは、特に「承久の乱」の解説として、玉川大学の多賀讓治先生の研究を引用させていただきました。土地（農地）を巡る騒乱は、しかし、米国のトランプ現象（2025年）として、今日まで続いていることを思えば、人類は、もう少し進歩しても良いのではないかと思う次第です。

マルクスは、資本論第3巻で次のように発言しています。

現代に生きる我々の参考までに引用して終わります。

「およそ権利を作りだしたもののは生産関係である。この生産関係がある一点に達して脱皮せざるをえなくなれば、権利とそれに基づく一切の取引との物質的な源泉、その経済的歴史的に正当化された源泉、その社会的な生命生産の過程から発する源泉は、なくなってしまう。より高度な経済的社会構成の立場から見れば、地球に対する個々人の私有は、丁度他の人間にに対するある人間の私有のようにばかげたものとして現れるであろう。1つの社会全体でも、1つの国でも、実に全ての同時代の社会と一緒にしたものでさえも、土地の所有者ではないのである。それらはただ土地の占有者であり土地の用益者であるだけであって、それらは、よき家父として、土地を改良して次の世代に伝えなければならないのである。」と。

（資本論第3巻第6編超過利潤の地代への転化第46章・国民文庫版⑪ p267～p268）

我々は、マルクス言うところの「より高度な経済的社会構成の立場」に一刻も早く到達しなければならない時にさしかかっていると思う次第です。

以上、皆様方の情報もよろしくお願いします。

それではまた、次回に Y o u r K. M